



### 中国がわかるシリーズ 25 長春の春

ライフネット生命株式会社

代表取締役会長兼 CEO、出口 治明氏

713 年、唐では玄宗の開元の治(～741 年)が始まりました。太宗の時代を初唐、玄宗の時代を盛唐と呼びますが、長安は極盛期を迎えようとしていました。世界中から人、物、金、情報が長安に集まってきたのです。太宗の時代から唐は積極的に留学生を受け入れてきましたが(現在のアメリカとよく似ています)、玄宗も、民族や宗教を超えて優秀な人材を登用しました。日本人でも、遣唐使とともに唐に渡った阿倍仲麻呂が重用されました(留学生、井真成の死去にも玄宗は弔意を表しています。また、9 世紀には、最澄や空海とともに唐に渡った靈仙が重用されています)。今日で言えば、アメリカへの留学生がオバマ政権の高官に任命されるようなものでしょう。

唐の解放性、当時の日本人の優秀性、どちらも刮目すべきだと思います(戦国時代や三国志の時代でも、お雇い外国人は、大いに優遇されました。これも、中国の一つの伝統だと考えられます)。盛唐の時代には人口も回復し、隋の盛時に並ぶようになりました。地方では、揚州や益州(成都)が商工業の中心となりました。また、季節の年中行事(元旦＝立春、春分、上巳節＝3 月 3 日、端午節、七夕、盂蘭盆会、秋分、重陽節＝9 月 9 日、冬至など)も、この頃にはほぼ出揃いました。そのほとんどが、現在のわが国に残されているのは、興味深いものです(青森のねぶたや、秋田の竿灯も、唐代の「元宵観燈」に遡ると言われています)。

しかし、長安の春と呼ばれた繁栄の陰で、国家の屋台骨とも言うべき均田制や府兵制は崩れつつありました。もっとも、[北]魏以来の均田制や府兵制がどの程度、全国に浸透していたかについては詳らかではありません。玄宗は宇文融を抜擢して括戸(逃亡農民すなわち逃戸と豪族・地主による均田地の不法占拠を元に戻す政策)を行わせ、一時的な成果を挙げましたが、大勢を覆すには至りませんでした。そこで、玄宗は、現実を直視して、平たく言えば徴兵制から傭兵制(募兵制)に切り替え、辺境防衛のために 10 人の節度使(軍の司令官が民政官を兼務する制度。ローマ帝国のテマに似ています)を置きました。節度使は、使職と呼ばれる(律令に定めのない)令外の官でした。節度使の下、辺境に張り付くことになった兵員は、(長征)健児と呼ばれました。